

暁烏敏の思想

——その生成と構造—— (一)

村山保史

はじめに

1 暁烏敏の思想

暁烏敏（一八七七—一九五四）は清沢満之（一八六三—一九〇三）門下の浄土思想家である。清沢の後継者たちが集まった浩浩洞では中心的メンバーとして佐々木月樵（一八七五—一九二六）、多田鼎（一八七五—一九三七）とともに「浩浩洞三羽鳥」に数えられている。学問的な趣のあった佐々木、倫理的な趣のあった多田とは異なつて、奔放な発言や行動によつて生前から暁烏に反感をもつ者は少なくなかつた。西田幾多郎（一八七〇—一九四五）もその一人であつたらしく、次のような孫の言葉が残っている。「暁烏敏について、『あの男は偽せ者だ』という言葉聞いたことがある。祖父の偽せ者だという言葉は、かなり強い否定的

な批判の言葉である」¹。西田は暁烏に解せないなにかをみたのであろう。とはいえ同じ暁烏に共感した者も多かつたし、おそらくその発言や行動のおかげで早くから伝記や小説が書かれ、その思想を対象にした研究も少なくない。これは佐々木や多田の研究が少ないことは対照的である。ただしそうした暁烏関係の伝記や研究をみるなら、暁烏の生前の関係者として批判的態度を一定程度譲歩して書かれたもの²が目立ち、残された膨大な著作・資料——しかもすべてが公開されているわけでもない——の全容を追うことの困難もあつてか、初期の『精神界』に掲載された論文や昭和期戦時の思想をクロースアップしたもの³も多く、批判的な態度で思想全体を分析したものとは言えない。本論の目的は、明治から昭和にかけて展開された暁烏の思

想のできるだけ広い範囲に考察のポイント——そのポイントには戦時を含める——を置き、そこからの俯瞰を通じて暁鳥の思想の生成過程と構造を、まずは公開された資料から抽出しようとするのである。

1. 生い立ち

A. 「中心の思い」

暁鳥の思想は時代によって変遷しており、そこに一定の論理や体系性を見出すのは容易ではない。変化する発言の奔放さに船山信一（一九〇七—一九九四）は手を焼き、暁鳥の言葉を引用した後に「という論理（?!）」⁴と記した。松田章一の『暁鳥敏―世と共に世を超えん―』に付された帯には「巨大なる混沌」という言葉が記されている。しかしそのように変化する思想であつても、そこに通底する土台でも言えるファクターを見出す手立てはないだろうか。それがあれば思想の基本構造を理解することもできるはずである。このように一定しない暁鳥の評価であるが、彼が少年期に生涯を左右する人物に出会い、敬愛し続けて理想としたことは誰しも納得することであろう。少年期にそうしたファクターの手がかりを見出せないかどうか、確認し

てみることにしよう。

暁鳥は石川県の片田舎、北安田にあつた貧しい寺、明達寺に生まれた。暁鳥の回想によると父の依念は一種の豪傑であつた。「私の亡父は妙な人で、虱が身体中に一ぱいにた〔か?〕って居ても平気で居るし、夏の夜蚊の沢山居る時でも平気で読書に耽けて居られた」⁵。おそらくはその豊かな知識を評されて「勢至菩薩の化身」ともされたが、異性に対してはモラルを逸したと思える逸話が残っている。「野便もした」（二三—五六〇）⁶。まっすぐに嘘がつけない人物であつた。「愚図愚図したことを嫌い、利巧と上手とを嫌い、真卒を愛した」（二三—五二二）。「……誰か質問をすれば、すぐ明白に答えて下さる。若し御自分で不明な所があれば、はつきりと、知らぬ、と言われました」（一三—五四二）。自由を好み、形式にこだわることなく誰とも会つた。「老人とも交わり青年とも交わつた。富者とも交わり貧者とも交わつた」（一三—五六〇）。一方で風雅をたしなむ美感、芸術的なセンスももつていた。「お茶の湯もやつた」（同上）。浄瑠璃が好きで花を好んだ。読書が好きで誰彼となく本を貸してやつた。暗記力と推理力にすぐれていた。そして暁鳥にとつてはなによりも子煩悩であつた。

父は、私が可愛いのでね、子供の時から叱られた事がなかった。十一歳までつれそうたのですが、いつも叱るような事をしないで、ゆるゆる訳をきかしてくれものです。そのおかげで、私は世の中に出て、誰も、彼も、私を可愛がってくれるものという中心の思いがなくなりません。友達は、おめでたい男じゃといいますが、わしは自分の幸福を感じています。そうして常に父の寛大な心を仰いでいます。(一三—五四〇)

依念が暁烏を叱ることはなかった。母の千代野が叱って暁烏が寺から逃げ出す騒ぎがあったときには「それじゃから、常に子供を叱るなど言うておるではないか、彼が帰らなかつたら、御まえ、どうする積りか」(二—二九八)と、むしろ千代野を責めたという。依念に甘やかされた暁烏はわがままに育った。当時を回想する暁烏のうちにも「中心の思い」は残っている。野本永久は「敏は一生を通して、どこへ行くにも『待たれている自分』という思いのある人であった」(野—二二¹)と伝えたが、「待たれている」とは愛され求められているという思いである。この思いが暁烏に生涯あつ

た。

金銭や物に頓着せず、世間的には上手く生きたとは言えない依念であったが、村人からは愛され、その愛情は暁烏にも注がれた。「今私が田舎の寺にいても、父の余徳によって村人の敬愛の的となつておる」(二—三五六〇)。しかし依念の生き方は千代野を苦しめることになった。依念は暁烏が九歳のときに他界した。寺は極貧状態で学費どころではなかった。「母はわらじをはき脚絆をつけて村の家ばかりでなく、近村の家々を一軒一軒私の学費を貰いに歩かれた」(二—一八)。暁烏はこの母を終生敬愛した。清沢の遺徳を偲んで明達寺境内に建てられた臘扇堂の向かいには歌碑が立つており、次のように刻まれている。「十億の人に十億の母あらむもわか母にまさるは、ありなむや」。

住職を継ぐには尋常中学校を卒業することが必要であったが、北安田に尋常中学校はなかった。金沢には、石川県と真宗大谷派が一八八八(明治二一)年十月に共同で設置した共立尋常中学校(その後、大谷尋常中学校と改称)があった。この初代校長が清沢と同様に東本願寺から選ばれて東京大学に学んだ今川寛神(一八六〇—一九三六)である。尋常中学校に通うには下宿が必要であったから、千代野は

従妹の田鶴栄の嫁ぎ先であつた金沢の即願寺を頼ることにした。一八八九（明治二二）年九月、十二歳の暁烏は共立尋常中学に入学し、即願寺の黒崎家で実子のように大切に育てられた。

わが信仰の果実を結ぶ種子は、如来手ずから之を蒔き給いぬ。わが父母はその畑を与え給いぬ。わが恩師は其の草を取給いぬ。而して種子を下すべく畑を耕し給いし人は誰ぞ。智栄院黒崎田鶴栄の君よ、……

我をして理想的女性の性格を思わしめよ、眼前御身の性格の髣髴たるを見る。我が胸中女性に対する尊敬の念あるは偏に御身の性格が我に銘せしめし跡也。智徳兼備の性格、恩威並び行うの行為は、我之を御身の上看見き。……

御身には生子のなかりしかば、我は黒崎家の愛子の如くなりし。否真の子なりともかくまでに愛せらるるは少かるべし。（二二―二三―二六）

暁烏は田鶴栄を敬愛し、田鶴栄の墓参を生涯続けた（野―二六）。こうして村人の助けによって村を離れて学ぶことが

でき、生家を離れても愛情をもって育てられた。その後、金沢の大谷尋常中学校を中退して十六歳になった暁烏は改めて今川と京都で会い、一八九三（明治二六）年九月、今川の肝いりによって全国から寺の子弟が集まる京都大谷尋常中学校（翌年七月から「真宗第一中学寮」となる）に編入を許される。ここで「わが恩師」清沢満之に出会い、成績優秀の級長であつた佐々木に会い、多田と会うのである。

B. 四つの志向

さて、ここまで暁烏の少年期の生い立ちを簡単にみてきた。思想家としての暁烏の生涯はこれからはじまるわけであるが、これまでの生い立ちのなかに今後の暁烏に影響を与えることが推測できるものがないだろうか。いくつか取り出してみよう。

(a) 社会性志向…誰もが自分をかかわいがるだろうという「中心の思い」からは、積極的に他者と交わり社会形成に参画することに物怖じしない（社会性志向）が生じるのではないか。またその志向を、他家で生活することを余儀なくされた際の寂しさや人恋しさが後押しするであろう。

さらに千代野や田鶴栄の行動は依念の早い他界や明達寺の貧しさゆえのものであったから、この恩に応えるために立派な僧侶にならねばならないという上昇志向もまたこの志向を後押しする。

(b)全体志向・社会性志向における社会の意味を強調すると、ひとつの全体に包摂されることによってはじめて個があると考える（全体志向）が生じる。そして全体に包摂されない個を孤立したものと考え、個の孤立を避ける傾向が過度になると、この志向からは、個の差異を無視してすべてを同質のものとしてみる傾向も生じることになる。

(c)オリジナル志向・「中心の思い」は親や親類によって植えつけられた根強い自己肯定感である。この自己肯定感からは自らの由来を肯定し、さらには自らが肯定する者と同じ由来から派生した者をも無条件に肯定しようとする（オリジナル志向）が生じるであろう。野本が「暁鳥の一つの性行として最も尊崇する人の子孫に対しては理屈なしに敬愛する情感をもつ」（野―五九六）と語った志向である。

(d)自然主義志向・「中心の思い」を最初に育んだのは依念であった。暁鳥が描く依念は——もちろん大人になった暁

鳥がめざすべき、あるいは一定程度は到達した存在として依念を描いているからであるが——暁鳥自身と重なっている。自然を愛して赤裸々とも言える生き方をした依念から、理想化をせずに自然や現実をそのままに表現しようとし、たとえそれが醜悪なものであっても表現を避けようとしないうる志向、十九世紀末から二〇世紀前半にかけての文学の表現を借りれば、（自然主義志向）とでも言いうるものが生じることが推測できる。

以上、少年期から四つの志向を抽出した。次にこのような志向を適用することで暁鳥の思想全体の整合的な解釈ができないかを確かめることにしよう。一般に暁鳥の思想は一九二〇（大正九）年頃を境にして分かれるとされるが、その前後をさらに二分して四分割する解釈^や、暁鳥の全生涯を三分割——清沢の死去まで、清沢の死去から大正末まで、昭和のはじめから暁鳥の死去まで——する解釈もある。ここでは一般的な時代潮流との対照のしやすさを重視して単純に明治期、大正期、昭和期に三分し、それぞれの時期における思想を確認してみよう。

2. 暁鳥思想の展開

A. 明治期

(1) 『精神界』と『POEMS』

暁鳥の文章がはじめて活字となったのは一八九〇（明治二二）年、十三歳のときの短歌である。「植て見る軒端の梅ぞ春毎に操を変えぬ千代の友なる」。ストイックな響きのある歌である。「千代」で母をかけているのかどうかはわからないが、ともかく風流を解しなかった清沢からは想像もできないデビュー作である。翌年には歌集を作っている。真宗第一中学寮時代には「愛天」という歌号や「非無」という俳号で、大学寮から出版されていた学術誌『無尽灯』に作品を投稿している。「非無」は敏の「びむ」という音をとったものだが、われわれはこの「愛天」という俳号を覚えておいてよい。

清沢との出会いは大谷尋常中学校でのことである。今川から偉い先生がいるということは聞いていたが、それが英語を教える清沢であるとは知らなかった。「清沢」先生に当てられた。暁鳥。ひよっと立って、よめません。どうした、しらべなんだのか。しらべたけれどもよめません。先生は、

そうかとおっしゃった。勉強はしておる、勉強しておるけれどもよめんのは事実である」¹⁰。気兼ねもなく平気で読めませんと言った明け透けな物言いに清沢は驚き、それを今川に告げた。今川はそれを暁鳥に告げた。「君は平気でよめませんというたそうな。勉強したけれどもよめなんだからよめんと云うたのです」¹¹。こうして暁鳥は「私はその時清沢先生に認められたわけであります。つまり、よめんということを臆面もなく云う奴ということで認められたのであります」¹²という思いをもった。端から見れば恥ずかしく映るようなことでも包み隠さず伝えることで清沢から認められたと暁鳥は受け取ったのである。

一八九六（明治二九）年九月に暁鳥は真宗大学に入学している。翌年二月には十九歳にして『無尽灯』編集を任され、ここで編集、広報、会計といった出版業務全般の基礎を身につけている。和歌、俳句、新体詩といった各種の詩のつながりで高浜虚子（一八七四—一九五九）や正岡子規（一八六七—一九〇二）らと知り合っている。こうした出会いは、後に各地で各界の有名人と出会っていくことになる最初の場面であった。入学してほどなく宗門改革運動の白川運動にも参加している。白川運動で暁鳥は人を動かすことを知

り、その最中に女性を知る。

こうして清沢に認められたと信じた暁鳥は一九〇〇（明治三三）年九月、清沢の後を追って上京し、佐々木や多田とともに浩々洞で『精神界』の出版に携わっている。暁鳥が仏教用語を極力使用しない『精神界』をつくらうと発案したのは、一般に解釈されているように読者にとって言語の意味が（理解）しやすいからというよりは、言語で書かれた内容が仏教の真理を表現するものとして読者を（感化）するのに役立つと考えたからである。この点は重要である。

「仏教の真理は世を化するに足るのであるが、言葉がむずかしいために感化力が薄い、仏教の熟語を使わないで平常語で仏教の精神を伝える雑誌を東京にて発刊したらということとを相談した」¹³。仮名が読む者の感情に直接的に訴えかける力を持ち、その後の考え方や行動を変える場合があることを暁鳥は自身の宗教体験ともいえる経験から知っていた。白川運動時代に女性を知って現実の自分と僧侶としてあるべき自分との齟齬に煩悶した暁鳥は、仮名で書かれた『歎異抄』に出会っていたのである。

私は運動中に、地方の運動員に交り、従来僧侶の墮落と

して痛罵していたことを自己の上に発見したので、学校に帰っても精神の痛苦が劇しく襲うてくる。その間白川村に清沢先生を訪ね、同学の多田・佐々木二君と道を語り、真宗の聖教を片端より読みゆくうち仮名聖教の終^マある『歎異抄』によみ至り、豁然として悪人正機の本願の救済にふれることが出来た。¹⁴

「知の佐々木」「意の多田」と並んで「情の暁鳥」と呼ばれた暁鳥であるが、われわれがここにみるのは、自らが情的であると同時に情の力を熟知してそれを利用して社会にかわり、自らが信ずる全体へと他者を巻き込んでいこうとするしたたかな知恵である。暁鳥と言えば、猪突猛進で知性からは遠い存在¹⁵ というのが大半の印象であろう。なるほどそれは半分は当たっているのかもしれないが、同時に暁鳥は多読であり、博覧強記で記憶力に秀でていた。表現能力といふことからみても、弁舌巧みで文章がうまく、筆も速かった。企画構成にも通じたアイデアパーソンであった。学問とは言えないが仕事が多かった。自分が動くのみならず、他者の心や体を動かす術にすぐれていた。それは単に自らの熱情の結果としてはからずも他者を動かしたとい

うことではない。それであれば同じ清沢門下の曾我量深（一八七五—一九七二）の方が長じていたであろう。むしろ情を意図的に取り扱う巧みな技術で他者を動かしたのである。それが「情の暁鳥」ということに含意されながらも見逃されがちな暁鳥の有能さであり、清沢ないし清沢宗の——さらには清沢を宗祖に据えた暁鳥宗とも言えるものを立ち上げるための——スポーツスパイソンともなりえた性質なのであろう。

こうして暁鳥は一九〇一（明治三四）年一月に発刊された『精神界』の庶務となり、二年後からは『歎異抄』を読むの連載をはじめた。八年に及ぶこの連載はまとめられて一九一一（明治四四）年に『歎異抄講話』として出版される。それは『歎異抄』の意義を清沢に伝え、『歎異抄』が一般に知られる機会のひとつになったが、清沢門下に暁鳥があることを世に知らせることもなかった。この頃の暁鳥と清沢のエピソードは両者の情的側面を示すものとして興味深い。

私は丁度『歎異抄』の教によって喜ばれた（喜んでいた）頃である。涙を出して『歎異抄』を喜んでおる。その喜びを先生のところを持っていく。涙を出して喜んで

おる。それを先生は、感情だ、そんなことを喜んで何になる、と云われた。散々やられる。……普通ならありがたいことだと云われるのである。が一向ありがたいと云われない。一時の感情である。そういうもの（が）何になる、と云われた。¹⁵

〔清沢先生は〕随分理性の強い方であったが、また情の細かい人であった。それは私共よく知っております。しかし、先生は宗教人が一種の陶酔気分になることを嫌うてお出になりました。……先生は念仏に陶酔する、或は感情的文句に涙を流すというようなことにそう重きをおいておられなかった。むしろそれを嫌うてお出になった。¹⁶

暁鳥によって『歎異抄』を知らされた清沢は後にそれを「予の三部経」に含めることにもなるが、『歎異抄』について詳細に語ることはなかった。この理由について子安宣邦は清沢の「道徳—宗教論」を構成する言語が「儒教的言語」であったことによるとする¹⁷が、そもそも清沢のもっているエトス（倫理的気質ないし感情）が、『歎異抄』に共感しても

それを暁鳥のように、自然主義的に表現することはもちろん、死の間際にいたるまで率直に表現することを許さない種のものであった。またそのエートスゆえに、暁鳥が好んだ『歎異抄』的な表現を習得しようとしなかったのである¹⁸。そしてこれが、同じく強い情をもっていたが処世術には長けず、いや長けようとせず、社会性志向をほとんど帯びなかつた清沢の、暁鳥との決定的な違いでもある。

貧しい田舎育ちの境遇が推進力となつたか、名声を得るにつれて暁鳥の交流範囲は広がつていった。キリスト者の内村鑑三（一八六一—一九三〇）にも会つてその著作を精力的に読んでいる。一般に暁鳥が書いたものには無造作にキリスト教の表現が使用されるが、それにはこうした出会いも影響しているのであろう。そしてこれはあまり着目されないことであるが、暁鳥が『精神界』と平行して一九〇二（明治三五）年に浩々洞から文芸誌『POEMS』を出版していたことも知つておいてよい¹⁹。暁鳥の文章は論文とも詩ともわからないものが多いが、当人のなかでは詩と論文は全体のなかである種の調和を保っている。「ペンを取つて一気に五十枚六十枚と『親鸞聖人論』を」書きあげてゆく、かたわら詩も湧く。又頭がドライにならない様にと上田敏

の『牧羊神』などという詩集も読んで頭のうるおいをつけてゆく」（野—三〇六）。暁鳥にとつて同時並行的なマルチタスクは苦にならない。論文と詩、仏教とギリシア神話、真宗とキリスト教……端からみれば異質のものを同時並行的に動かすマルチタスクであるが、当人にとつてそれらは無関係のものではなく、むしろひとつの全体のなかにあつて相互に関係する部分のようなものであつたと思われる。正確にいえば、それは暁鳥にとつてマルチタスクではなかつたのである。

(2) 恩寵と方便

この時期の暁鳥の思想は「恩寵主義」と表現されている。それは罪業を含む一切の事象が阿弥陀仏の働きによるものであり、そのままで安心を与えるとするものである。暁鳥は恩寵主義イコール精神主義であると考ええる。一九〇一（明治三四）年十一月に『精神界』に——京都に出ている清沢に代わつて巻頭文として——書いた「精神主義と性情」をみてみよう。多くの読者から非難を招いた周知の文章である。

吾人を救済し給う絶対無限、衿哀大悲の光明は、殺生する者に殺生を止めざれば救わずと宣わず、邪淫を好む者に邪淫を禁ぜざれば救わずと宣わず、偷盜する者に偷盜を、妄語する者に妄語を、飲酒する者に飲酒を止めざれば救わずと宣わず。飲酒する者は飲酒する俛、妄語する者は妄語する俛、偷盜する者は偷盜の俛、邪淫する者は邪淫の俛、殺生する者は殺生の俛、我を頼め極楽に迎えむとはこれ吾人が救主の大悲招換の勅命にあらずや。樵夫に舟漕げと言わず、舟人に炭焼けと言わず、男に女たれと言わず、女に男たれと言わず、栗の毬は針のある其の俛、洪柿は其の洪のある俛助けんとあるはこれ如来大悲の御心にあらずや。……

要するに吾人の精神主義は、人を殺す者も、国を売る者も、物を盗む者も、徳高き賢者、識博き智者と共に安慰を得るの道なり。男女貴賤を論せず、知者愚者を議せず、善人悪人を分かつたず、一味平等の安慰を得て、花咲く春も、鳥鳴く夏も、葉の散る秋も、雪ふる冬も、慈悲あたたかき如来の光明に満足と快樂とを感じるは、これ吾人精神主義の大道なりとす。(二二—二四—二四三)。

ここでは人がいかなる状態にあつても阿弥陀仏(阿弥陀如来、如来)の恩寵——この恩寵は慈しみ深い神的存在からの恩寵といった意味だけでなく、人間からみれば非合理的だが神的存在からみれば合理的であるような秩序、つまり摂理の意味も含んでいる——のうちにあり、非倫理的な行為であろうと宗教的な次元では救済を妨げないことが、詩の技法である反復法を使った文体のなかで歌われている(一一—二二九と一一—二六三も参照)。われわれの観点からすればここには醜惡な事象もそのまま表現する自然主義志向も反映されていると言えるし、そこには清沢との出会いの場面での「師からのお墨つき」が後押しとしてあることも推測できるが、すでに真宗第一中学寮で「韻文家」と評されていた暁鳥からすればお手の物の、したたかな仕事である。

浩々洞においては多田も暁鳥と同じく恩寵主義の考え方を強くとつたが、多田が多くの犠牲によつて一瞬一瞬を生かされているという強い罪業の自覚からそのような自分でさえ生かし続ける仏教を「恩の宗教」²⁰と呼んだのに対し、暁鳥は——おそらく、その最初期の契機としては性的な問

題、ストイシズムの破綻による罪業の自覚があったが、いつのまにかそれが背面に退いて——より直線的に、いかなる罪業ないし罪悪であつても、いやさらにいかなる事象であつても自らの安心を揺るがしはしないと考える。いわば〈遠い／遠うからありがたい〉という点がまず置かれる多田型の恩寵主義ではどこまでも収束することなく対峙し続ける二項（如来と自己）の並行的な関係が強調され、〈近い／同じだからありがたい〉という暁烏型の恩寵主義では無数の個がひとつの全体のなかに収斂する方向が強調されている。対立を保持する二元論の志向と、包摂によって対立を止揚しようとする一元論的な全体志向はそれぞれ多田と暁烏の思想的特質として二人を融和させないものとなつている²¹。これに関しては安藤州一（一八七三—一九五〇）の暁烏評がおもしろい。「君子は豹変すと言う、暁烏君も亦善く豹変性を帯んで居た。君は自由奔放を好んで、規則という事が大嫌いである。……規則という中でも君は道德の規則を特に敵視した。これが君の長所ともなり亦短所ともなつた」²²。多田は善悪、聖俗、内外等々の差異をどこまでも峻別せよと求めるが、暁烏は区別を嫌つてさつさと無数の個を一切合切、全体のなかに絡め取ろうとする。暁烏にとつ

ては個が個のままにとどまるということとはそれが他のものとの関係なく孤立していることの意味であり、自らの性質に固執して他と関係できないことの意味である。

こうして多田は暁烏から離反し、昭和期に入つても彼が編集した『みどりご』誌上でしばしば暁烏を批判した。師の清沢についてもその信心が不十分であつたと責め、後輩の金子大榮（一八八一—一九七六）が異安心問題を起こした際には金子の立場が真宗学を哲学や聖道門と混同するものとし、徹底的に追い詰めて白黒つけようとした。一方、暁烏は多田が清沢への攻撃に転じたことを嘆いたが、自分から離れたことを責めなかつた。暁烏が他人を執拗に責め続けることはない。「私は人の過失を追窮するようなくずぐずしたことは大に嫌いである」²³。ともあれ、このように「精神主義と性情」には暁烏の全体志向が現れており、全体志向から生じる、個の独自性を否定する問題も現れている。安藤は暁烏が「豹変」したとしているが、そもそも暁烏のなかではなにも変わっていないのかもしれない。

さてこの頃の社会情勢をみると、一九〇四（明治三七）年にはじまる日露戦争も恩寵主義の延長戦上でみられている。まず一貫して戦争を避けるべき罪悪とする。ただしそ

れは「肉的性質を有する者の人情」（二二—三七一）から戦争をみた場合である。暁烏はむしろ観点を変えること、「信眼を開いて、浮世の戦争の上に靈光のきらめきを見」（二二—三七三）ることを求める。「我等をして仏智見の上にたちて言う所あらしむれば、眼中主戦非戦の別なく、主戦論も是也、非戦論も是也、主戦論も非也、非戦論も非也、勝も是也、敗も是也、勝も非也、敗も非也」（二二—三七二）。つまり暁烏は好戦論でもトルストイの非戦論²⁴でも勝ちでも負けでもなく「超戦争観」をとり、全体的な「仏智見」の観点からするなら悲惨な戦争にもなにかの意味があるとするのである。明治期の暁烏にとつて戦争は絶対者としての如来が与えた恩寵——「不可思議の靈用」「靈の妙用」「靈性の教訓」「如来の方便」——であり、長く続く太平の世からは得られない宗教精神修養の機会なのである。それは人間や、人間の総体としての国家にとつては「進歩の段階」のひとつである。そして戦争における命の奪い合いは「自己心内の投影」であり、人に罪の自覚を促し、犠牲的精神を尊重すべきことを教える。暁烏は孤立的な個人主義を否定して小我見（偏狭な個人的思考）を離れての行為としての「犠牲的精神」を賞賛する。「犠牲的精神は近世的産物に

あらず、固より古代の遺物なり。されど新金欄が古金欄にかかざるが如く、近代の個人主義は到底この犠牲的精神の光沢に比すべくもあらず。古より大なる事業は皆この犠牲的精神によりて成らざるはなし。明治の維新は決して近代の個人主義によりて為されざりき」²⁵。ここにもわれわれの想定する全体志向が現れている。

(3)結婚

暁烏の個人的な身辺をみるなら、一九〇二（明治三五）年十二月に佐々木の妹であった房子と結婚している。野本によると、一八九八（明治三一）年三月にはじめて佐々木から房子の話を聞いたときには面識はなかったが躊躇なく妻にしたいと言っている。

「房子からの手紙を示しながら」之を見てくれ給え。二番目の妹の房子、君が昨年四月始に来た時に居たあの小さい方だ。あれも今年十三歳になった。小学校はもうすむ、女学校に入り度いがお父さんが許してくれないから、僕に何とかしてくれというて寄こしたんだ。君この妹覚えていてでしょう。花火を見に行った時後

からついて来ていたんだが——」

「いや僕は気がつかなかった。君には妹が三人あると言うたね。女学校に行きたいというなら出してあげたらいいじゃないか。……」

「君、僕にその妹をくれぬか、僕の所へ来るには嫁入支度は何もいらぬ。その代りにその分丈本人に学問をさせておいてくれ」(野——一九)

その後、この話は一九〇二(明治三五)年九月に進んでいる。房子も暁烏に恋心を抱いていたようである。

「然し君(暁烏)、母が言うのには、今迄一ぺんも見てもらっていないのだから、見合をしてほしいと言っているんだ。その上ではつきり話をきめたいとね」

「僕は見合なんかいやじゃ。見た上でいやじゃと言うたら、そんなに僕を思ってくれている房子を殺すようなものじゃないか。元々君の妹だからほしいと思っただから見合なんかいらぬよ。話はすすめてくれ」(野——一二一)。

松田は「暁烏という人は美人好みで、しかも頭の良い女性好みでした」²⁶としているが、それが房子との結婚の理由になったわけではない。暁烏は成績優秀で人格円満であった佐々木に中学時代から一目置いていた。『敬愛すべき男』と敏は(佐々木に)一目惚れをした」(野——三六)。なるほど房子は長身の美形であったようだが、たとえ会ったことのない人であっても尊敬する佐々木の妹であること、これが最も重要なことであり、これがほほすべてのことであった。われわれの観点からすれば、これは自分が肯定する者と同じ由来(この場合は血縁)のものを肯定しようとする暁烏のオリジナル志向によるものである。

結婚によって身を落ち着けた暁烏は一九〇三(明治三六)年の清沢の死後、浩浩洞での仕事を続けながらも次第に地方の教化活動に重点を置くようになっていく。人びとは熱をもって暁烏を迎えた。「そうして「清沢の死後」五六年もする内に日本中に響くようになり、清沢宗なるものが出るらしい勢力となりました」(二二一七)。

(未完)

注

1

上田久「祖父西田幾多郎」南窓社、一九七八年、一六四頁。以下、暁烏の文献に限らず文献からの引用に際しては人名も含めて旧漢字を新漢字にし、旧仮名遣いは現代仮名遣いにする。ただし文献からの引用以外で金子大榮に言及するときは「榮」の字を用いる。踊り字は同の字点(々)以外は現代的表記に改める。原文の強調記号は採用しない。〔〕内とルビは本論の筆者による補足である。引用を除いて人物の年齢は満年齢で示す。

2

暁烏の秘書であった経験を生かして『暁烏敏伝』(大和書房、一九七四年)を書いた野本永久は、暁烏のスキヤンダルが掲載された『中外日報』の記事すべてを全集に公開することをよしとせず、また愛人との手紙のやり取りすべてを公表することを保留した。西村見暁は『暁烏敏先生―この残された問い―』(日ノ宮聖徳堂、一九七七年)で逡巡しながらも暁烏の弟子としての立場を捨てなかった。『暁烏敏全集』を編集し、野本と同様に『暁烏敏―世と共に世を超えん―』(上下、北國新聞社、一九九七―一九九八年)において暁烏の生涯にわたる分析を行った松田章一も、戦時の著作を全集に入れなかったことに「先生は戦争協力者であってほしくないという思いが、こちらにあったからでもありませんよ」(『暁烏敏の挑戦』北國新聞社出版局、二〇〇

五年、二〇二頁)とし、一種の身内びいきがあったことを伝えている。

この種の研究の嚆矢は福島和人の『親鸞思想―戦時下の諸相―』(法藏館、一九九五年)であろう。

朝日ジャーナル編『新版日本の思想家』下、朝日新聞社、一九七五年、一二八頁。

「男らしき服従」『求道録』無我山房、一九〇七年、四四頁。

以下、暁烏からの引用には、涼風学舎版『暁烏敏全集』(全二七巻別巻一巻、一九七五―一九七八年)からのものにはその巻数とその頁数を、『暁烏敏日記』上下(一九七六―一九七七年、暁烏敏顕彰会)からのものには「上」または「下」と表記し、続く数字で頁数を示す。

以下、野本永久『暁烏敏伝』からの引用には「野」と表記し、続く数字で頁数を示す。

西村見暁は『更生の前後』までの時期を「往相期」、その後を「還相期」とし、さらに往相期と還相期をそれぞれ二分している(『暁烏敏先生―この残された問い―』、一七頁)。

松田章一『暁烏敏の挑戦』、八五頁。

『清沢先生臨末の御教訓講話』香草舎、一九三七年、七八頁。

同右。

同右、七八―七九頁。

同右、一四二頁。

同右、一四〇頁。

3

4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

20 19

翌年には多田が編集した詩集『迷の跡』（文明堂）に詩を掲載している。「恩寵の囿圍」「恩寵の宗教」無我山房、一九〇八年、

18 17 16 15

同右、八〇頁。
同右、一〇一—一〇二頁。

『歎異抄の近代』白澤社、二〇一四年、一〇九頁。

この意味で、清沢が「我信念」において比較的率直な表現で信仰告白をしたことは興味深い、これについても次の暁烏の言葉が参考になる。「先生は私が時々発句をやると冷かされました。その先生が最後のお手紙に、血を吐いた病の床に時鳥と書いていかれたから：私は先生に、先生は最後に私の真似をして発句などやっていたかれましたと云うて話合おうと思います。又このお手紙のお書き添えへのお言葉に、候という字を使わんで手紙を書いてみた、これは君の文を習うたのであると云うてあります。私は言文一致で手紙を書いて原君に出した。先生はそれを真似て見られたのだと思う。先生はいつもお手紙は候文でありました。私のいただいたお手紙の中にはこのお手紙だけが言文一致であります。……最も大切なお書き物はこのお手紙を下さる二日前にお書きになりました「我が信念」という一文であります。これは先生の信念を憚りなく率直に書かれたお書きものであります」（『清沢先生臨末の御教訓講話』、六二—六三頁）。清沢はこのときはじめて、ようやくにして暁烏に近い文体で書くことを自らに許したのである。

七八頁。

21 この部分の議論は拙論「近代真宗仏教者の犠牲観（一）——多田鼎と暁烏敏を中心として——」（『思想史研究』第一五号、東京大学日本思想史・思想論研究会、二〇一二年）の議論と一部重複する。

22 福嶋寛隆、赤松徹真編『資料 清沢満之（資料篇）』同朋舎、一九九一年、二二七頁。

23 「人の我が頭を打つ時に」（『求道録』、二二頁）。

24 「一方は一切殺生禁断を旨とせる仏教徒、一方は四海兄弟と公言せる基督教徒は、今や極めて猛悪なる方法を以て互に残害殺戮なしつつあり。を読んで、今更の如く、『当相敬愛』『兵戈無用』の金言の思わゆる事に候」（二一—三六七）。

25 「犠牲的精神」浩々洞同人『沈思録』金尾文淵堂、一九〇七年、一四三頁。

26 松田章一『暁烏敏の挑戦』、二八頁。

（本研究はJSPS科研費JP18K00024の助成を受けたものである。）

（むらやま やすし・大谷大学）